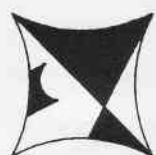




—— 本号の内容 ——

- 全道造形連盟 函館大会報告
- 創立50周年記念事業について
 - ・記念講演会
 - ・記念公開研究会
- 第54回全国造形教育研究大会
に向けて



北海道 造形教育 連盟報

No. 111 2000.12.13 発行

発行 北海道造形教育連盟

委員長 芝木 秀昭

事務局 〒004-0845 札幌市清田区清田 5 条 2 丁目18-1

札幌市立清田南小学校 藤井 正治

☎011-881-1975 FAX011-881-9759



接 木

～函館大会を終えて～

第50回全道造形教育研究大会

函館大会事務局長 鈴木 秀 明

5月、函館公園で一人木洩れ日の中を歩いていました。図書館の側に一本の梅の木があって白い花を披露していましたが、良く見ると枝の一本が接ぎ木されピンクの柔らかな色彩を放っていました。光がゆらゆらと照らします。木によせる愛情と確かな技術によって何代にも渡って美しい花が受け継がれていくのでしょうか。接ぎ木によって、そこには木と木の命の交流があるのだろう・・・ピンクの花はその成果でしょう。この接ぎ木はあまりせっかちにしていけない。あまり若すぎる木でも、枯れたり腐った木でも旨いかな。また、自然にそむいた途方もないものを試みても失敗するでしょう。成功のためには風土、病気、土壌など木の状態を見計らいながらタイミングよくすることが大切です。

さて、全道造形教育研究大会も昨年の49回網走大会に新たな1回展を接ぎ、記念すべき第50回函館大会が平成12年7月26日、27日の両日、道南地域（函館、渡島、檜山）の造形教育の実践を歴史とロマンあふれる函館を会場として開催する事ができました。

函館市立駒場小学校、函館市芸術ホール、道立函館美術館を会場に熱い討議や講演、児童生徒の作品鑑賞や美術館での鑑賞が行われ、当初の目的を無事終了する事ができました。ここに改めて全道の造形連盟会員の皆様をはじめ参加者、会場校、関係者のお陰と心よりお礼申し上げます。

これまで、私達は2年前から今日の図工美術の多様なイメージの研究発表の場として、その声に答えるため大会準備委員会は自由で闊達な活動をおし進めてきました。残念ながら準備委員の中心にいました藤井昭夫先生が昨年度末、突然病気で大会の仕事はできなくなりましたが、その信念を引き継いだ繪面和子先生によって当初の理想をさらに広げ開催することができました。これは函館の美術研究会がお互いの考えを尊重し、誰もが大会に寄せる情熱を持っていたから成しえたことと思っています。この間、研修を何回となく開いてきましたが自由な表現形式が芽生え、強く児童生徒のリアリティに執着してくる作品が多く見られたことは大会の成功を予感できました。

さて、大会当日「21世紀を間近にして、美術教育はどんな局面を迎えているのだろうか」この疑問に連盟会員が無頓着であるはずがないとの思いは確信に変わりました。実際、本大会に寄せられた提言物を俯瞰してみると、どの実践も敏感な感受性を働かせていて、この重苦しい問題に対して何らかの形で反応していました。これは現代の子供の空白になった精神を呼び戻そうとしているからでしょうか。

「現代は一体どういう時代なのか」「私達の生きる風土とそこから形成されるイメージをどのように表出させていったらいいのだろうか」今日の状況をふまえて「心の風景（ビジョン）の発信を」を大会のテーマに授業や分科会構成も特色のあるものにしました。

第一に公開授業は幼稚園、小学校、中学校、複式、聾学校と造形研究大会では初めて校種の枠を越えた授業構成を現実にしたこと。第二に分科会名を学年や領域のもつ枠を取り外したものとし、五感と知を総合的に結びつけた想創活動を念頭におき7分科会のテーマを「〇〇からの発信」といたしました。

1 大地からの発信

（五感を通して豊かに表現する想創活動）

粘土という素材に出会い、においや手触り等を楽しみ、五感を通して素材に関わりながら全身で造形活動した。



2 空間からの発信

（身近な環境と関わり、イメージを広げる想創活動）

豊かな体験とは、子供達の造形感覚（五感）が十分発揮され高められる。ここでの気づきは五感の発揮される瞬間であり、イメージの深化が図られた。

3 社会への発信

（美術と生活、社会との接点を大切にしたい想創活動）

子どもの感性、発想力、構成力を基礎に豊かな想創活動に取り組む一つの方法として、社会や日常生活の関わり、接点から、自分の想いや発想を発信した。

4 地域（社会）からの発信

（周りや生活環境からイメージを広げる想創活動）

地域に出かけて、気づいた面白いことや興味のあることを表現すると、題材のもつテーマはより深まり追求できるようになる。また地域を感じさせる様々な方法は、発信の可能性を広めることになった。

5 大地からの発信

（地域の特色、学校のよさを生かした想創活動）

大地の恩恵を受け文化を築き現代社会で生活する私達に自然は様々なかたちで心（感性）に訴え、揺さぶってくる。今21世紀にたくましく生きる子供達に豊かな地域の自然を特色ある活動を通して、豊かな心を育むことが強く望まれている。



6 光（地域）からの発信

（光・空間を意識した構想・制作を通して

驚き感動する自分を発見する想創活動）

光の持つ不思議な魅力を一人一人に発見させ造形することは、大きな意味を持つ。特に函館をアピールするこれ

らの実践は子供達の夢を広げ、居心地のよい彩やかな空間をつくり上げる表現活動となった。

7 生き物からの発信

（自由な背景の中で自分像の表現を楽しみ、

地域をベースに創る想いを求める想創活動）

私達が自由になつかしい風景を心に思い浮かべる時、何とも言えぬ優しい気持ちになり、表現する意欲がふつふつと湧き出る。

以上のように、自分の住む地域を基盤に先見性や夢、潤い、喜びに満ちた懐かしい想いが反映して豊かな自分づくりにつながる授業が実践されたと確信しています。

「21世紀を間近に美術教育はどのように展開し、どんな局面を迎えているのか。」「具体的な実践を通して今一度、確かめてみよう。」というのが今回の大会のねらいでもありました。

「表現の喜び」というのは、造形活動にとって最も大切なことの一つです。子供が自分の力で意欲的に取り組む過程で表現の喜びを味わうことができ、造形表現の基礎が身に付いてくるのです。



造形活動は通常、美的感覚一思考計画一表現一鑑賞の過程を通りますが、実際には、試行錯誤があり、迷いや困惑、直感的閃きも時として同居します。

特に一つ一つの表現活動は個性的な営みを活発にし、自発的・積極的な活動を期待できます。人間の内面に持っているものを表出・表現、高めていく中で内にある自らの情緒を自覚していくという喜びを味わわせたいと願っています。

漫然としていては進歩は期待できません。50年の歴史の灌木に接ぎ木が施され、来年も新しい色を持つ花が生き生きと育つことを望んでいます。

函館大会での各地域の風土や生活を凝縮した実践の交流は、それぞれの地に豊かな花を咲かすでしょう。

「心の風景を受信」

帯広市立緑園中学校 海富 隆

授業風景は、子供たちの光り輝く瞳で満ちあふれ、あたかも昨夜の函館山からの夜景のように、多くの人の心を引きつけます。

大会運営にあたり、全ての部分に、きめ細やかな配慮がなされており、心豊かな指導者の想いが、本当に心豊かな子供たちを創り、育むということを実感させられた二日間でした。

このように、素敵な心の風景(生きる喜び)を共有させていただいたことに、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

感動

函館大会へのメッセージ

感謝

「子供たちと教師のパワーに圧倒」

厚岸町立真龍小学校 内山 博之



前回、第42回函館大会に参加したときと同様、今世紀最後の記念すべき第50回全道造形教育研究大会函館大会でも、日頃全道各地で造形教育に活躍されている多くの先生方と交流ができました。

大会参加は、日頃何かと刺激の少ない私にとって大変刺激的であり、有意義なものでした。特に、「造形」を切り口とした教育を実践する仲間が集うことができたこの会では、何よりも授業公開及び各分科会を通して、子供と一体となり、そして造形教育の本質まで迫る授業実践に触れられ、今後の造形教育の在り方や方向性を考える上で大変参考になりました。

また、大会の企画運営で度肝を抜かれたのは、玄関前のおよそ3～4メートルぐらいの恐竜（ゴジラ？）の立体作品。そして、開会式での研究概要説明の折に、体育館前面にあった函館山からの風景画と夜景時のライトアップの演出でした。聞くところによると、その2つは中学生が作った作品であるということであり、それを指導した美術教師の力量、そして子供のエネルギー（もしくはパワー）に圧倒というか感心させられました。そして、今大会に向けて取り組んだ足跡として実践資料集も出されており、今回の研究大会に向けて、綿密な研究の積み重ねや授業実践等があったことが推察されます。ただ残念に思うのは、今大会も含め、過去に出された多くの素晴らしい実践やその資料集等に、造形教育に携わる方が触れる機会は決して多くはなく、中にはそのようなものが存在することさえも知られていないという現実もあるのではないかとことです。

最後になりますが、今後多くの造形教育に携わるものが過去の実践記録を共有できるようなシステムづくりができればと思います。掘り起された過去の素晴らしい実践の中には、現在そして未来につながる造形教育の何かヒントとなるものが隠されているような気がしてなりません。





「子供たちのこえ」

小樽市立忍路中央小学校 竹生 元

造形の全道大会に初めて参加させていただき、多くの感銘を受けて小樽に帰ってきました。

特に心に残るのは、先生方一人一人の個性を生かした多くの実践を目にすることができたことです。

実践者が自信を持って楽しく授業に当たっているため、子供達の反応が真剣であり、目も輝いていました。驚きの声、笑い声、教室が一体となって創作活動している様子が今も思い出されます。

ともすれば、日常の煩雑さに追われ、準備が億劫になりがちな図工・美術教育も、教師が楽しみを持って指導に取り組めば、結果として児童一人一人が生き生きとする創作活動を支援することにつながる事が分かりました。

これからの更なるご発展を祈念しまして、得ることの多かった本大会へのお礼にかえさせていただきます。

「“表現すること大好きな子”を育てるために」

函館若葉幼稚園 福家 睦美

シャツとパンツ姿になって「これから何をするのかな？」という面持ちの3歳児の子供達。トンネルをくぐると粘土のかたまりが。最初は恐る恐る粘土に触っていた子供達も、その心地よさに気づくと、粘土の柔らかさを足の裏や手のひらで感じ取りながら、歓声を上げて、全身で伸び伸びと遊んでいる姿が印象的でした。その後、小学生以上の子供達の授業を見学させていただき、児童期以降の子供達の姿を垣間見ることができたことも、貴重な機会となりました。

幼児期は知的好奇心や探究心が旺盛な時期です。この生涯の人格形成の基礎を培う大切な時期に、五感を練り「表現すること大好き！」という芽を育ていけるように、公開保育、分科会等で学んだことを日々の保育実践に生かしていきたいと思います。ありがとうございました。



「造形教育を学ぶ貴重な体験」

札幌市立星置中学校 雄鹿 桃子

今回の函館大会に参加することで、「教材をどのように生かして授業が作られているのか」、「それぞれの先生方が授業に対してどのような視点を持っているのか」、「生徒が興味を持って取り組めるような授業のアイデア」などについて考え、色々と参考にすることができ、とても勉強になりました。

私は初任者なので、授業参観や研修の機会は割りと多いと思いますが、今回のように広い地域から美術教師が集まり、「美術教育」について考えられる場があるのは、とても貴重なことだと思います。今後も、このような研究と交流の機会に参加することで、色々助けられ成長することができるのではないかと思います。

この日のために準備して下さった多くの方々、又、当日お世話になった方々に感謝したいと思います。



『これからの図画工作・美術教育を考える』

～今、私たちは、何を考え、どのように進めることがよいのか～

講師 文部省初等中等教育局 教科調査官 板良敷 敏 氏

まず最初に北海道造形教育連盟創立50周年記念公開授業研究会の開催にあたりまして、大変めでたいことだと思います。50年間続けてこられたということが、いかに大変なことだったということを改めて感じます。

私たちもそういうことでは、大変心強い限りでございます。

今日は1時間半ほど、『これからの図画工作・美術教育を考える』ということで、おつきあいをいただければというふうに考えております。

今年、来年と新学習指導要領の移行期間であり、その中で、図画工作・美術などをどのように考え実践していくかが、課題である。今日は、大きく三つに分けて話を進めていきたい。

一つ目は「何を私たちは、考えるのか」、二つ目は、「どのように進めるのか」、三つ目は「今日の授業の感想」の順で述べたい。

1. 何を私たちは、考えるのか

一つに、副主題にもあるように「今、私たちは、何を考え、どのように進めることがよいのか」ということで、学習指導要領は、どのような考え方で改善され進められたのかをまず押さえておく必要がある。

《自ら学び自ら考える力を育成する》

「生きる力を育む」という言葉がある。これは、21世紀を担う子どもたち一人ひとりの生き方が大きな柱となっていた。

学習指導要領の改訂のねらいの中に「自ら学び自ら考える力を育成する」ということが二項目目に位置付けられている。私たちの評価というのは、あくまでも「学校教育」の中の話であって、「美術」に対する評価ではないということである。

「自ら学び自ら考える力を育成する」という言い方は抽象的すぎるため、一体どのように解釈するかということになるが、それはそれぞれに課せられた問題である。

生きる力とは「自分で課題を見つけ、自ら学び自ら考

え、主体的に判断し、物事や問題を解決する資質や能力」「思いやる心、感動する心、豊かな人間性を育成する」などの授業の重要な要素として、教育課程の答申文には書かれている。

子どもたち一人ひとり自らが、さまざまな問題に立ち向かい、それを見つけだし、そして考え、解決していく、これが美術の場合、材料を集め自分の思いを実現していく。他の教科によっては、それが結論という形になり、私たちの教科では作品ということになる。

《基礎基本を確実に定着させる》

もう一つは、ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本を確実に定着させるということが、改訂の方針の三つ目にあるが、これは、これまでもあったものである。

しかし、最近では学力の低下の問題もあり、基礎基本の定着が叫ばれている中、美術でも必ず出てくる。

基礎基本をとらえるとき、建物に置き換えて、基礎は土台、基本は柱ではないかと。しかし、果たして本当にこれで十分なのかというとそうではない。とりわけ図画工作や美術では、「読み・書き・算盤＝基礎基本」のようにはいかないのではないか。私たちの場合、普段からリフレッシュしていく、多様性、弾力性、機能性という働きが必要なのではないか。

このように考えていくと、基礎・基本とは一体何だろうか、ということになる。抽象的になってしまうが、基礎基本は全教科に言えることだが、「基礎的・基本的内容」が正しい言い方である。その「基礎的・基本的内容」は、学習指導要領に示していることである。

次に、そういったものは何のためにあるのか。それは、子どもたちの資質や能力育成するために、適切な内容として基礎・基本というのがある。決して基礎・基本を身につけたからそれでいいというのではなく、基礎・基本を通して取り組み、持てる力を働かせ、伸ばし、考えること、それがねらいでないとおかしい。これをとらえた上で、基礎・基本の定着をもう一度振り返ってみる必要があるのではないと思う。



2. どのように進めていくのか

《多様な表現を大切にしたい》

新しい学習指導要領の中で、四つ目の方針に「各学校の特色ある学校づくりを進める」と示されている。その内容の厳選や弾力化を図る必要性が言われている。そのようなところから総合的な学習の時間というものが出てきたわけである。

こういった大きな方向性の中に、教科の内容を考えていく必要がある。

教育課程審議会の中で、図画工作や美術における具体的な改善のポイントが示されている。

小学校の図画工作では、目標と内容をまとめて示している。今までは、内容を学年別に表示していたが、今回はこのようにまとめて示すことによって、内容を厳選したりするなど、より一人ひとりの子どもたちの多様な表現を大切にしたいということである。

子ども観、指導観、学力観といったものは、すでに限界にきている。その中で、子ども観を取り上げて言うなら、一人ひとりの子どもは可能性を持っているということである。それまでの子ども観というのは、「白紙の状態」で生まれ育ってくるので、ものをしっかり教え込み、知識を身につけさせなければ、子どもたちは能力を発揮できないとされていた。

そのことが大きく転換したのは、心理学や認知心理学などで、さまざまな実験や調査などを通して、「人間の子どもは大変有能な存在」であると指摘され、共通の認識になっている。

《資質能力向上の学力観への転換》

もう一つは、内容依存の学力観から資質能力向上の学力観への転換である。子どもたちの資質を育成するために適切な内容を考えていく必要があり、その内容は、暫定的なものであり、不断にリフレッシュされるものでなければならない。

《評価の見直しについて》

評価の問題は、他人と比べる相対評価から、目標実現の評価、どれだけ多く実現したのかというふうことの評価に、指導要録にもあるように四つの観点に転換したが、さらに見直しを図っているところである。近い時期に明らかにされていくであろう。

《新しいスタートを》

もう一度、子ども観、学力観、指導観を見なおし、新しいスタートを切ろう。今年と来年、移行期間であるから、何とかこの間に方法を見つけだし、取り組んでほしい。

3. 公開授業の感想

「つくり、つくりかえ、つくり続ける能力を発揮する」という造形遊びの視点から見させてもらった。

《不思議なフレーム～ここっていいよね～》

手の部分をつくりたかった児童がおり、ビニール袋を立体化したかったが、なかなかできず、膨らましてみたが空気が抜けてしまった。そこで、足元にあった糸のようなものを袋に入れて思いを実現していた。

こういったささやかな経験を積み上げていって、その状況状況によって、ものを使ったり、そのものの意味を変えたり、ものをつくりかえたり、新しい価値をつけ加えたりするといったことが、造形活動の中で不断に行われるようになる。そういう意味で今日やったことは、非常に可能性をはらんでいる。今日の授業で、その児童はそれなりに自分の納得する形で目的を達成したと思う。

《紙でつくる美しく夢のあるおもちゃ

～遊んでくれるかな》

授業の初めと終わりで、中学生の表情がどう変わるか期待して見ていた。その中で、小一の子とだんだん接近して関わったり、直接手に取り教えてあげたりといったほのぼのとした様子が時間の経過とともに数多く見られた。

この授業は、中一と小一との関係と、先生と大人と子どもたちの関係といった非常に複雑な関係に成り立っている授業であった。そういうことで、大変おもしろい授業であったと思う。

◇紙面の関係で講演の概要について紹介させていただきました。

◇小見出し等は広報部の判断で入れさせていただきました。

板良敷先生、貴重なご講演
ありがとうございました。

「感じて つくって ひらく 授業」 をめざして

第54回全国造形教育研究大会

北海道大会研究局長 川 島 正 夫

私たちは21世紀に生きる人間像に迫るために〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉を大切にしたい造形活動を創ろうと考えている。「いま感じてほしいこと」「ここでつくってほしいこと」「わたしにひらいてほしいこと」を基軸にして授業を構築していきたい。

「感じてほしいこと」は造形活動で大切にしたい「心」になるし、「つくってほしいこと」は造形活動の「内容」になる。そして、「ひらいてほしいこと」は従来の言葉で言う「題材の目標」や「美的価値」ということになる。また、子どもが「ひらく」ことによって内面が豊かになり、自分の未来につながるものであってほしいと考えている。

「ひらく」ということを子どもの側からみると、“高まりの自覚”というように考えることができる。小学校高学年以上の子どもでは“自己評価”という形で現れることが可能だろうし、小学校低学年以下の子どもでは“ひたる”“没頭する”などの姿として現れるであろう。

子どもが「ひらく」姿の現れこそ、造形活動が子どもに提供する価値そのものである。子どもが〈過去〉から〈現在〉の高まりを自覚する中で有能感や自己の可能性の広がりを感じ、〈未来〉を紡ぎだしていくものとする。

だから、「ひらく」というキーワードを授業構築や授業評価の観点の中で重要視し、「子どものひらく姿がみられたか？」を合言葉にしていきたい。同時に、子どもが自分の世界を「ひらいていく」ために「感じる」ことを授業構築の柱として考えなければならない。物や人、世界を五感を使って体全体で「感じる」ことが「ひらく」前提になると押さえているからである。

私たちは、来年の全国大会に向け、具体的な授業づくりの視点となり、その後の研究討議の切り口となり得るような『五つの扉』（①遊びと造形、②もの・材料と造形、③コミュニケーションと造形、④暮らしと造形、⑤個性と造形）を設定し、未来をひらく造形教育の在り方を探っていきたいと考えている。

全国大会では『〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉を基軸にして造形の未来を創る』の研究主題のもと、17の授業公開（幼稚園3、小学校7、中学校6、高等学校1）を予定している。私たちは、子どもたちが表現に向かう源動力となる「たのしさ」「心地よさ」「美しさ」「すごさ」「うれしさ」をベースに「感じて つくって ひらく 授業」の構造化に取り組み、『五つの扉』から子どもの「ひらく」姿に迫っていく全国大会を、全国の造形教育の仲間たちとともに実現していこうではありませんか。

連盟50周年記念公開授業研究会

小学校では幌南小の沼田玲子先生が『不思議なフレーム〜ここっていいよね〜』（5年）の授業を公開。ビニールシートを使い、子どものものの見方、感じ方（＝



いま)を自分の変身させたい場所・景色(＝ここ)に重ねることで、表現する楽しさに気づかせた。

一方、宮の森中の高橋久美子先生が小学校1年生と中学1年生との合同授業『紙でつくる美しい夢のあるおもちゃ〜遊んでくれるかな』を公開。おもちゃを通して互いの思いを交流し合う光景が広がった。

風よ 大地よ 夢よ

北からはじまる造形の未来

第54回全国造形教育研究大会 北海道大会・at. 札幌

第51回全道造形教育研究大会



2001年

北海道大会日程表

第一日目	■会 場:ホテル ライフォート札幌			
9/6 (木)	10:00		13:00	15:30 17:00
	受 付		大 学 部 会	
	どうぞ、北の大地 北海道・札幌へ		受 付 全小図連 全中美連	代 議 員 会 大会開会式 連盟総会 挨拶／報告 基調提案／大会宣言

第二日目	■会 場:なかのしま幼稚園・幌南小学校・三角山小学校／道新ホール			
9/7 (金)	9:00		10:15	12:30 14:30 15:00 17:00
	受 付		授業公開 [17] 幼稚園 [3] 小学校 [7] 中学校 [6] 高等学校 [1]	分 科 会 研究討議 提言討議
			昼食・移動	受 付 講 演 会 遠藤 友麗 氏 【文部省視学官】 レセプション

第三日目	■会 場:札幌芸術の森	
9/8 (土)	10:00	
	受 付	
	ワークショップ パネルディスカッション 全国実践バザール	

この北海道の大地に鋏を入れ、大いなる文化を創造したフロンティア精神に溢れた人々の思いを受け継ぎ、私たちは、百年の時を超えて、開拓精神を結集し、新しい21世紀の造形教育、そして新しい文化、芸術を共に考え、発信します。

この北海道で〈いま〉〈ここ〉を共有し、〈わたし〉を発見しましょう。

50周年記念誌

『虹色の造形』発行

◇多くの皆様のご協力により、50周年記念誌『虹色の造形』を発行することができました。

◇まだ残部がありますので、ご希望があれば送料着払いでお送りします。(本体は無料)

◇札幌市立山鼻小学校 今 裕子までご連絡下さい。

【TEL…011-511-6616 FAX…011-531-5295】



P 25の初代委員長のお名前「野村」が誤って「村野」となっておりました。

訂正しお詫び致します。

大会シンボルマーク



制 作…堀 口 甚 一
(札幌市立屯田西小学校)

□全体は私たちのホームである“北海道”を形どっている。

□造形教育を通して子供たちの未来を豊かにしていきたいという願いを込めて筆(はけ)で北海道を描いている。

□中央の“/”で、“驚き”と“感動”“発信”を表現した。

□全体をなめらかな曲線にし、描ききる“勢い”を表現した。

地区サークル紹介



●空知美術教育研究会

「37年の歴史の重み」

10月3日。深川市立深川小学校を会場に「全空知の子どもの作品を語る会」が開催された。

この研究会は、空美（くうび）が主催する最大のイベントである。回を重ねて今年で37回目。毎年、空知管内の各市町村教育委員会等の後援をいただき、空美の会員と開催校の教職員とが一緒になって作る会である。主役は子どもと子どもの作品である。

参加者は、良い作品だけでなく、学級全ての子の作品を持ってくることになっている。うまくいかなかった作品を持ってくるのが貴重である。なぜなら、それは勇気のいることであり、問題を抱えている作品は、討論を現実に引き戻す。そして、作品をどうやって良くするかを話しながら、実は、子どもをどう変えていくかの話をしているのである。

そんな空美は、長くこの会を受け継ぎ、37回の歴史を重ねてきた。そういった諸先輩達の功績は大きい。

その他に、新春ゼミナール、デッサン会、スケッチ旅行などを毎年のように実施し、会員の実践力の向上の一助になっている。今年は初めて会員展覧会を開催した。歴史の重みを感じながら、これからも、加速・前進する空美である。〈奈井江町立奈井江小学校 廣川 徹〉

●帯広市図工・美術部会

「帯広の造形を平成14年の大会へつなぐ」

帯広市は、全教職員が自分の希望に合わせてそれぞれの部会に入って研究を行っています。図工・美術部会は今年度は、88名の部員がいます。

この何年かは「子どもの心を広げ、創造性をどう高めるか」というテーマのもとに研究を重ねてきました。

年3回予定されている「作品交流会」は、普段の授業の中で作られた作品を持ち寄り、指導の工夫や、悩み等を交流しています。指導技術を向上させるために「授業研究」や、「実技研究」も行っています。「美術館鑑賞」は、部会員以外にも呼びかけ、教師の美術に対する資質を高めるための一役をになっています。「小中学校造形展」は、普段の学習の中でできた児童生徒の作品を展示し、多くの市民にみてもらっています。

新指導要領が変わると今までとは違った価値観が要求されてくると考え、恒例で行っている研究の他に講師を招いて「美術講演会」を行いました。

平成14年に十勝・帯広で大会を引き受けましたが、今までの積み重ねの上に、更に新しい図工・美術教育をどのように受け止め実践していくかを、これからさぐっていかうとしているところです。

（帯広市立明和小学校 山口 雅子）

●室蘭造形教育研究会 「新体制でスタート～よろしくお願ひします～」

これまで室蘭市教研造形部として全道造形に加盟し活動をしてきましたが、部員数の減少、部会運営費の削減、すぐれた実践で活動をリードしてくれたベテランの先生方の退職等の影響で活動がやや停滞気味に陥っていました。ここ数年、部会内で造形連盟との関係について論議を重ねてきましたが、「過去の財産を受け継ぎながら、現在の図工・美術教育の動向についても知ることは大切である」という結論に達しました。そこで新たに「室蘭造形教育研究会」の名称で任意の会員による別組織を作り、会費を集め、活動内容も明確にして造形連盟との関係を継続していくことになりました。この経緯については、4月の北海道造形教育連盟の全道地区委員総会で了承されています。

現在の会員数は11名と少数ですが、授業研究集会、夏・秋の造形展、デッサン会、実技講座やフィールドワークといった教研の活動に加えて、全道造形教育研究大会、北海道教育美術展への積極的参加など全道造形とリンクした活動を展開していきたいと考えています。今後は、さらに会員を増やし造形教育の未来も構想できる会にしたいと思ひますのでよろしくお願ひします。

（室蘭市立武揚小学校 北村 哲朗）

—— あ と が き ——

函館大会、ブレ大会の成功を糧に来年はいよいよ全国大会です。こうして全道の造形情報をまとめながら、更なる成功の予感を感じています。各地区の力強い協力をよろしくお願ひします。広報部／小泉 誠、東 尚典、山室ゆかり、太田寿栄子、富田賢司、中山龍男、加藤正幸、土肥宏充、中居正光